〈ケア〉を考える会（第 105 回）

■日時：**2015 年 12 月 20 日（日）　13：30～17：30**

■会場：京都市山科区安朱中溝町３-２
山科駅より東 徒歩３～４分の民家 （山添）
（安朱保育園 東隣）

■当日の大まかな予定
13：00　⇒ 有志集合…会場準備等
13：30～　⇒ 学習会(読書会)
15：30 頃～　⇒ 懇親会（笑いヨガなども）
17：00～17：30　⇒ 片付け、終了
（その後で、名残惜しコーヒータイム ？ ）

■内容
（１）学びの会（読書会）

鷲田清一『老いの空白』（岩波現代文庫、2015 年刊）
「 ４ 〈弱さ〉に従う自由 」

（２）懇親会‥‥食べながら飲みながら語り合います（持ち込み歓迎）
※山添さんご夫妻の手料理は絶品です。美味しいこと請け合い
※懇親会参加者で実費（1000 円程度）ご負担願います

★参加申し込み、問い合わせ、メーリングリスト登録希望
⇒ 林まで ： 884michiya@gmail.com

★どなたでも参加できます。初参加歓迎。飛び入り参加、突然参加もありです。
★読書会は、本を読んでいなくても遠慮なく参加できます。読んできてほしいけど‥‥。

▼おたがいの言葉を手がかりに考える時間をもつこと、確かめながらゆっくりと考える時間を共にし、分け合う
「考え」でなく、「考え方」をお互い共有してゆく
結論はありません
プロセスをゆたかに
（長田弘『なつかしい時間』P.191）

ひととひととの関係において重要なのは、各人が主体的にどのようにしようとしているかではなくて、いつとはなしにお互いが心を開いてしまっているという事態である。
（池上哲司『傍らにあること』P.169）

「老いの空白」ノート ③

▼老いはなだらかな減衰ではない。老いは、時間の連続性の隙間で、それがふと途切れるような仕方で、〈老い〉の意識として現れてくる。こういう時間の弛緩の中では、現在が未来を含むのではなく、不在の未来が現在を、不意を襲うかたちで訪れるのであった。そのかぎりで〈老い〉は人生のいつの時期にも訪れうるものであった。意のままにしうるという disponibilité の増進がいのちの成熟なのではなくて、意のままにならないという indisponibilité の受容、そういう抵抗の経験をおのれの内に深く湛えることがいのちの成熟であると言うべきであろう。その意味では、〈老い〉とは、他なるものの受容の折り重なりとして現象するといえる。（80 頁）

▼何かを意のままにできるということが〈いのち〉の成熟なのではない。そうではなくて、意のままにならないということの受容、そういう「不自由」の経験をおのれの内に深く堪えつつ、何かを意のままにするという脅迫から下りることを自然に受け入れるようになるのが、〈いのち〉の成熟であろう。その意味では〈老い〉とは、他なるものの受容の折り重なりとして現象するといえる。〈老い〉をむしろ衰退や対抗とみるところに〈老い〉のかたちは現れてこようがない。

人生を「できる」ということからではなく「できなくなる」というほうから見つめてみると、もっと違う〈いのち〉の光景が眼に入ってくる。「作る」「できる」ではなく、ただ「いる」というそれだけで価値が認められるような、ひとについての見方、それが「高齢者問題」では賭けられている。〈老い〉は「問題」ではなく、人類史の「課題」としてここに浮上してきている。（105～106 頁）

「〈ケア〉を考える会」ホームページ
http://care-kyoto.jimdo.com/

岡山でも：「〈ケア〉を考える会-岡山」
http://okayama-care.jimdo.com/